

Title	クロールプロマジンによると思われる円形脱毛症様の脱毛を来たせる2例
Author(s)	西村, 耕作; 片岡, 善一
Citation	日本外科宝函 (1960), 29(3): 878-880
Issue Date	1960-05-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/207100
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

クロールプロマジンによると思われる円形脱毛症様の 脱毛を来たせる2例

京都市 大羽病院 (院長: 大羽鹿治郎博士)

西 村 耕 作・片 岡 善 一

〔原稿受付 昭和35年12月12日〕

A REPORT ON TWO CASES OF EPILATION LIKE ALOPECIA AREATA CAUSED PERHAPS BY CHLORPROMAZINE

by

KOSAKU NISHIMURA and ZENICHI KATAOKA

From the Oba Hospital (Director: SHIKAJIRO OBA, M. D.)

The authors experienced on the same day two cases of baldness like alopecia areata which seemed to be the side-effect of chlorpromazine. The provoking cause in both cases might be the oppression of a certain part of the head for a long time in coma, but the nervous disturbance at the hair-root and the drug rash by the blocking action of chlorpromazine on the autonomic nerve seemed to have developed into the epilation.

Such epilation is seen more often in the female than in the male; therefore, from the cosmetological viewpoint too, surgeons should pay attention to the change of the position in coma in their use of chlorpromazine as potentiated narcosis. Thus they should avoid oppression of a long duration and prevent epilation and decubitus.

緒 言

H. Laborit (1951) のいわゆる人為冬眠法以来 Chlorpromazine は各科に於て広く使用されているが副作用も少なくない。皮膚に関する副作用として発疹、皮膚炎、褥瘡等の記載もかなり多くみられるが最近私達は同一の日に Chlorpromazine が使用され同じ経過をとり円形脱毛症様の禿を生じた2例を経験したので報告する。

症 例

第Ⅰ例: 患者は23才の女子。腸閉塞症。

開腹術の際に強化麻酔として Chlorpromazine 50 mgを腰麻に併用した。約14時間の昏睡から覚醒したが

後頭部に鳩卵大半球形の有痛性腫瘤を生じた。腫瘤は弾性硬、波動を認めず、発赤なく圧痛著明でその部の毛髪に触れるだけでも痛を訴える。翌日には疼痛軽減し腫瘤も縮少しはじめ4日後には腫瘤も圧痛も全く消失したが、10日後頃から次第にその部の脱毛を来し14日目には前の腫瘤に一致した鳩卵大の円形脱毛部を生じた。その後人工太陽灯照射、アセチルコリン局所注射、サリチル酸ワセリン塗擦等の局所療法を約1ヵ月間行なつたが頭髮再生の傾向は認められなかつた。

第Ⅱ例: 患者は24才の女子。催眠剤中毒症

自殺の目的で市販の催眠剤「ゆめる」60錠(1錠中にブロムワレリル尿素 100mg, クロールプロマジン 1 mg含有)服用し昏睡状態で収容された。胃洗滌、輸液、強心剤によつて約12時間後に覚醒したが、第Ⅰ症例と

全く同性質の腫瘤を右側頭部に生じたが 3 日後に軽快退院した。その後第Ⅰ例に円形脱毛を来したので或いは本人にもと来院を求めた所、果して前の腫瘤部に一致した円形脱毛斑を認めたが加療は行わなかった。

考 按

以上の 2 症例が偶然にも同一の日に同性質の痛性腫瘤を有髪部に生じ同様の経過をとつてその部の円形の脱毛を生じたことに興味をもち比較調査した所、腫瘤の発生までには次のような薬剤が使用された。

第Ⅰ例 オビスタン 30mg
ビレチアジン 50mg
クロールプロマジン 50mg } カクテル M₁
ベルカミン S 2 cc 腰 麻
エフエドリン 0.1% 1 cc
リンゲル氏液 500 cc

第Ⅱ例 ブロムワレリル尿素 6 g } 「ゆめる」60錠中
クロールプロマジン 60mg }
ビタカンファー 1 cc 2 本
アンナカ 10% 1 cc 2 本
リンゲル氏液 500 cc

以上のように両者に共通するものとしてはリンゲル氏液とクロールプロマジンだけであることから、一応クロールプロマジンが相当な役割を果しているのではなかろうかと考えられる。以前から手術患者、催眠剤中毒患者には時に頭部の脱毛がみられているようであるが最近クロールプロマジンを使用した麻酔後に発生した脱毛症が報告され川村等、平田等、佐野等が相当数の症例をあげている。いずれも私達の経験した 2 症例とはほぼ同様の脱毛を認めていることから、私達の 2 例もクロールプロマジンが主因をなしているとみて差支えなからう。2 症例共に 12~14 時間昏睡状態にあり、昏睡中の体位は第Ⅰ例は背位で後頭部に枕、第Ⅱ例は吐物の誤飲をさけるため右側臥位で右側頭部に枕を置き、昏睡中一度も体位変換は行なつていなかったし、枕は一般に用いられているもので特に固いものではなかった。又血圧は、第Ⅰ例：術前 115/70、術後 75/50 mmHg、第Ⅱ例：65/52 mm Hg であつた。以上の点からみて血圧の低下と長時間の圧迫による局所的循環障害は、大きな役割を果しているとみられ、この点はこれまでの報告でもとり上げられている点である。しかしそれなら当然仙骨部、足踵部、或いは大転子部、腸骨腰部等にも同様の痛性腫瘤を生じてよいと思われるが、私達の経験では体の他の部分には何等の所見も

認められなかつたから単なる局所的循環障害だけでは説明し難く思われる。クロールプロマジンの副作用として薬疹が認められるが、頭部の圧迫が誘因となりそこに薬疹を生じその部の脱毛を来したものの、或いはクロールプロマジンの自律神経遮断作用により毛根部に何等かの神経性失調が起りその部に著明な血圧の低下と長時間の圧迫等の因子が加わり毛根部の変化が高度となり遂に脱毛を来したものと思われる。川村等となえるようにクロールプロマジンが種々の反応機能を抑制することからして圧迫等の刺激に対しての適応機能の低下により脱毛に至つたものとも解釈出来る。また性別に発生状況をみると円形脱毛症が男に多く女の 2.5 倍あるのに反して、クロールプロマジンによる円形脱毛症様の禿はこれまでの報告では女に多く川村等は女子は男の 2 倍と報告しているし私達の 2 例も女子であつたことは興味深い。私達の経験した 2 例はその後の長期に亘る経過観察が行なわれなかつたので予後について断定出来ないが、これまでの報告例では大部分が 1.5 ヶ月の加療で治癒におもむいていることから考えて、必ずしも悲観すべきものではないと思われる。しかし、これまでの報告では頭位変換を昏睡中に行なうことによつて脱毛を防ぐことが出来るとしていことから、今後クロールプロマジンを用いた強化麻酔には、この点充分な配慮が望ましい。

結 語

以上述べたようにクロールプロマジンの副作用として生じたと思われる円形脱毛症様の禿 2 例を報告したが、女子患者にとつては美容上相当の意義を持つたものであるから、外科として強化麻酔等に使用した際には、昏睡中には体位特に頭部の位置変換に注意し有髪頭部の一定部位の長時間に亘る圧迫をさけて脱毛症の発生予防に注意すべきであると思われる。

文 献

- 1) 大井実等：強化麻酔による自律神経機能の变化。最新医学，11，236，昭31。
- 2) 川村太郎等：強化麻酔にみられた脱毛を伴う頭皮の病変。日本臨床，15，766，昭32。
- 3) 木村裕：円形脱毛症の統計的観察。日本皮膚科学会雑誌，68，160，昭33。
- 4) 小林竜男：クロールプロマジンの薬理。最新医学，11，462，昭31。
- 5) 佐野栄春等：クロールプロマジン麻酔後に発生した後頭部の斑状脱毛。皮膚科紀要，52，113，昭32。

- 6) 谷一郎：パラミンに因る自殺未遂者に観られた脱毛例。日本耳鼻咽喉科学会会報，**61**，216，昭33。
 7) 平田孟等：クロールプロマジン麻酔後の禿髪

- 症。長崎医学会雑誌，**32**，1465，昭33。
 8) 細井義三郎：脱毛症の統計的観察。臨床皮膚泌尿器科，**12**，159，昭33。

先天性象皮病の1例

京都大学医学部外科教室第2講座（指導 青柳安誠教授）

伴 敏彦・横田祥夫・三木成仁

〔原稿受付 昭和35年1月16日〕

A CASE OF CONGENITAL LYMPHEDEMA

by

TOSHIKO BAN, YASUO YOKOTA and SHIGEHITO MIKI

From the 2nd Surgical Division, Kyoto University Medical School
 (Director : Prof. Dr. YASUMASA AOYAGI)

A girl of 9 years old. She has been noticed of painless swelling of the left lower limb, especially on the back of the left foot.

At operation, local subcutaneous tissue was found to be yellowish-white, vascular and of the tendonlike consistence.

Histologically, proliferation and dilatation of the lymphvessels were found.

緒 言

本邦における先天性象皮病の報告は比較的少数で、われわれの調査した範囲では山本等¹⁾の報告以来、7例^{2)~7)}を算えるに過ぎない。しかもその殆んどが学会報告の抄録であり、まとまつた報告は見受けられない。最近われわれは先天性象皮病の一例を経験したので、此処に報告し、本邦報告例との比較検討を試みた。

症 例

患者：岡○由○ 女子 9才

主訴：左下腿殊に左足背部の無痛性腫脹

現病歴：生後間もなく左下腿殊に左足背部の無痛性腫脹に気付いた。この腫脹はその後身体の発育に応じてその程度を増して来ているが自覚的には何らの障害も認められない。

既往歴：3才の時左下肢に発疹を来したことがある他に著患を知らない。

家族歴：気管支喘息の素因が認められるが両親兄弟に四肢の腫脹或いは畸型を呈したものは無い。

全身所見：体格中等，栄養可良，脈搏数82，血圧最高110mm Hg，最低40mm Hg，呼吸数21，胸部，腹部に異常所見はない。赤血球数490万，ザリー80%，白血球数6,200，中性球44%，うち桿状核細胞6%，分葉核細胞38%，好酸球3%，好塩基球0%，大リンパ球14%，小リンパ球34%，大単核及び移行型5%，尿所見では異常所見がなく，出血時間3分。

局所々見：左下肢全体にわたつて発疹の後と思われる米粒大から大豆大の色素沈着が散在性に認められる他，左下腿下1/2から足背部にかけて一様に腫脹し，これは殊に足背部に於いて著明であり，一部は豚皮様を呈しているが皮下静脈の怒張は認められない（図1）。触診すると皮膚は肥厚し，硬度は弾性硬，局所